

編集後記

江崎 幹宏 佐賀大学医学部附属病院光学医療診療部

近年、表在型非乳頭部十二指腸上皮性腫瘍 (superficial non-ampullary duodenal epithelial tumor ; SNADET) の診断・治療方針が学会などでも頻繁に取り上げられるようになった。その背景には、SNADET の発見頻度が増加している一方で内視鏡による質的診断が難しいことがある。さらに、内視鏡治療に伴う偶発症のリスクが高いことに加えて、手術が選択された場合は時に臍頭十二指腸切除といった侵襲度の高い術式を余儀なくされるといった治療上の問題もある。また、解剖学的特性から十二指腸には胃型腫瘍と腸型腫瘍が混在するため一律の診断基準で判定できないといった病理サイドの問題も挙げられる。その結果、生検診断における正診率は高くなく、治療方針決定において十分な根拠となり得ない場合も存在する。そのような背景の下、本特集号は、SNADET の画像的特徴ならびに病理診断基準の問題点を整理し、現時点での一定のコンセンサスを得ることを目的として企画された。

序説の矢作論文では、SNADET における内視鏡診断・治療における問題点が整理されている。SNADET に関する問題点を把握したうえで、主題へと読み進んでほしい。

八尾論文では、十二指腸の低異型度上皮性腫瘍における形質発現と細胞増殖動態を加味した腺腫と癌の病理組織学的鑑別法が提唱されている。本特集号の肝とも言える「胃と腸」編集委員の全病理医による座談会のポイントを理解するうえで重要である。

牛久論文では、SNADET の臨床病理学的特徴を解析し、胃型形質癌は十二指腸近位側に好発し、SM 癌の段階で脈管侵襲や未分化型組織像を呈するものもあり、高悪性度形質に関連している可能性を示唆している。

平田論文では、SNADET および SNADET 様病

変の内視鏡所見を詳細に解析している。同論文では、胃型腫瘍では面状の胃腺窩上皮様領域を伴う孤立性隆起として認めることが多いのに対し、腸型腫瘍では上皮の白色化を伴うことが多いことから、両者の鑑別点となる可能性を示唆している。

辻論文では、SNADET における腺腫と癌の鑑別について、NBI 拡大観察の診断能を検討している。本検討では八尾らの提唱する病理診断アルゴリズムを gold standard として用いていることから、病理組織学的所見と対応した内視鏡所見を把握しやすい。

吉水論文では、非乳頭部十二指腸 SM 癌 12 例の臨床病理学的特徴を内視鏡所見とともに提示し、ほとんどの症例で胃型形質の発現を認め、高率にリンパ節転移を認めたことを報告している。

そして座談会では、症例検討においてエキスパートの病理医の病理診断が一致した症例と一致しなかった症例をベースに徹底的に討議することにより、SNADET の病理診断における問題点を抽出し、病理診断方法・基準についてある程度一定したコンセンサスが提唱されている。複数例の病理組織学的所見の提示とともに進められている本座談会は、SNADET の病理組織学的診断における現状と今後の方向性について臨床医の視点からみても理解しやすい、目玉企画であり必読に値する。

以上のように、本特集号には NBI 拡大所見を含めた SNADET の内視鏡所見の特徴、ならびに病理診断の問題点と今後の方向性が詳細に記載されており、この一冊で SNADET の診断に関する最新知見が習得可能となっている。明日からの十二指腸腫瘍および腫瘍様病変の診療に間違いなく役立つ一冊として自信をもってお勧めするとともに、SNADET の画像的特徴・病理診断基準の確立に向けて今後さらなる知見が集積されることを期待する。